



(76) 入試会場に監視カメラ

不正撲滅に厳しい姿勢

野村综研(上海)咨询有限公司

夏の恒例行事、年に一度の全国大学入学試験の季節が到来した。今年は全国で1000万人を超える受験生が6月7～9日の3日間、試験を受けた。大学入試には毎年、受験生とその家族のみならず、社会のあらゆる人たちの関心が寄せられている。またこの時期になると、若いころの自分の姿が甘酸っぱい思い出と共に頭に浮かんでくる。

中国では大学入試が非常に重視されている。問題作成を担当する関係者は作成期間中、外界と一切連絡を取ってはいけないし、学生は携帯電話をはじめとする通信機器を会場で見たり使ったりしてはいけない。何らかの利害関係から試験問題を外部に漏らした場合は刑事責任まで追及されることなどからも、その重要性を垣間見ることができる。

◇31省で監視カメラ導入

今年の大学入試では、セキュリティー面で特に注目することがあった。デパートやスーパー、コンビニ、ビルの廊下、道路などで目にする監視カメラが今年初めて試験会場に導入された。国家教育部の試験指揮センターの規定で、電子監視システムが31省で今年から導入されることになり、このうち北京、遼寧省、陝西省の3地域では全会場にカメラを導入した。上海ではまず、普陀、閔行、金山の3区にある80カ所以上の会場で試験的にカメラを使用。3区での試験結果を見て、改善を加えた後に他区に展開し、最終的には全会場に導入する予定である。

各省市の教育局と中央の教育部の試験指揮センターに向けて各会場に設置されたカメラから画像データをリアルタイムで送ることができ、全国の会場内の状況が一目瞭然となった。試験の監視が徹底されるようになり、必要に応じて画像を保存することもできる。カンニングなどの不正があった場合には責任追及に有力な証拠を提供できる。

◇通信機材の持ち込み根絶

携帯電話などの通信機材を会場でこっそり見たり使ったりしているところを発見されたら、その受験生は今まではその場で受験科目を無効(0点)にするなどの懲罰を受け、厳しく責任追及されていた。加えて今年からは、会場内で携帯電話が鳴るだけでも、その年の受験資格はおろか翌年の受験資格まで取り消される厳しい措置が取られるようになった。

◇新型インフルエンザにも配慮

中国は2003年の新型肺炎(SARS)の教訓を真摯(しんし)に受け止め、今年の春から夏への季節の変わり目に世界各国に広がった新型インフルエンザ対策に取り組んでいる。各会場には、単に発熱しているだけの受験生用の「発熱受験室」と、新型インフルエンザが疑われる受験生専用の「インフルエンザ受験室」が用意された。

◇セキュリティー対策が徐々に浸透

社会生活の各方面におけるセキュリティー対策を含む監視態勢の未整備・未成熟が中国では常に指摘されている。悪質な事件が発生しても、責任追及の上で有効な証拠はなかなか提供されない。試験会場のビデオカメラのような機器がさらに普及すれば、セキュリティー意識が徐々に浸透し、不正の撲滅に寄与することになる。

(コンサルタント 黎慧珏)